

播種量を異にする青刈エンバクの収量並に、生育相に関する試験

松本 聰*・沢田耕尙*・真木芳助*

MATUMOTO, S., SAWADA, T. & MAKI, Y. The Influence of Seed Rate on
the Hay Yield of Oats

九州地方における青刈エンバクは、早春にかなり厚播（普通は9升）し冬期間に数回刈取るのを慣行としている。

* 九州農業試験場

各地での播種量を異にする青刈収量試験は、いずれも差が認められないと報告されている。しかし青刈収量は播種期、刈取期、刈取回数及び生育期間中の気象条件により、著るしく変化すると思われる。筆者らは

表1 草丈及び莖数の経過

調査 月日	2 升		4 升		6 升		8 升		10 升	
	草丈 cm	莖数 本	草丈 cm	莖数 本	草丈 cm	莖数 本	草丈 cm	莖数 本	草丈 cm	莖数 本
10. 26	6.4	8.1	6.5	14.8	6.5	14.3	7.0	25.8	6.2	31.2
11. 25	18.5	33.0	20.5	65.4	20.1	77.6	22.9	103.9	24.0	160.3
12. 16	27.5	31.1	33.5	71.4	33.9	107.0	35.8	106.1	37.6	149.3
1. 11	31.0	63.2	35.9	78.3	35.6	88.6	38.9	107.1	40.2	117.3
2. 12	27.3	120.4	32.2	132.6	34.9	134.3	37.6	143.1	39.1	149.9
3. 10	40.5	112.0	40.6	126.7	42.7	115.6	42.9	140.8	42.6	156.1
3. 20	76.1	82.4	82.8	104.5	85.6	96.8	85.2	118.8	85.3	124.2
4. 12	111.7	75.0	108.9	78.7	111.2	78.5	111.4	91.0	112.6	95.7

日向種を用い播種量を2~10升の5段階とし、10月15日に2尺の条播を行い翌年4月26日(出穂期)に1度刈を行つて、播種量を異にした場合の青刈収量並びに生育期間中の草丈及び莖数の経過を追跡し、それらの要因と収量の関係について1953年~54年に九州農試(熊本)で試験を行い検討を加えたので、その結果を報告する。

成績 (1) 草丈及び莖数の経過：これらの経過は表1に示すように播種量の多い場合は、概して草丈は高く莖数が多い傾向が認められるが、しかし気温の低下による莖数の減少は大きく、下葉の枯死が多い。なお刈取期14日前の4月12日では播種量によつては草丈に差が認められないが、莖数には有意差があつた。

(2) 収量：播種量を異にした場合の青刈収量(風乾物)ならびに各部割合を示したのが表2である。播種量による青刈収量には有意差が認められない。しかし各器官の割合は播種量の多い場合は葉の割合が少くその反面に莖の割合が多くなつている。

考察 本試験の範囲内では、エンバクの播種量を異にした場合は、その収量に差が認められないが、それは播種量が多くなれば莖は細く、葉が小さくて少い。それに反して播種量の少い場合は莖が太く、葉は大き

表2 青刈収量及び各器官割合

播種量	調査 項目	青刈収量 (風乾物) kg/反	各器官割合(重量%)		
			葉	莖	穂
2 升		759.4	16.3	69.0	14.7
4 升		826.2	15.9	68.1	16.7
6 升		974.0	14.8	69.5	15.7
8 升		944.6	15.2	68.6	16.2
10 升		1132.	13.7	71.3	15.0

く1個体の数も多くなつている。このことから単位面積に前者のように個体が多くあるのと、後者のように数少く存在する場合とでは、その間に差がないものと思われる。

これによつても秋播して出穂期に1度刈するような場合には、9升もの播種量は必要としないかも知れない。

しかし九州地方での厚播の慣行は、前述したように冬期間に2~3回も刈取を行う場合の青刈収量は、単位面積の莖数に支配されることが大きいので、必然的に厚播を行つて収量を増加する方法が行われているものと考えられる。

なお播種量による栄養収量の多少については今後の検討にまたねばならない。